

インド留学記

その3

恩師ババット先生のこと



東方学院講師
駒沢大学講師
阿部 慈 園

俳聖芭蕉にこんな句があります。

さざれ蟹がた 足はひのぼる 清水哉しみずかな

東方学院院长中村元先生の最近著『学問の開拓』
(佼成出版社)にこんな一文があります。

蟹はおのれの甲羅に似せて穴を彫るとい
う。(一八二ページ)

インドの恩師P・V・ババット先生の指導の
もと、約四年半、わたくしは小さいながらも学
的基盤ともいうべき「蟹の穴」をつくることか

できました。

帰国後、どこにも就職口のなかったわたくし
に、中村先生は、

「東方学院にきて、サンスクリット語の初級
を教えなさい」

といってくれました。爾来、東方学院の講師と
して七年の星霜が流れました。その間、先生は
わたくしに、実に八冊の共同執筆（共著）の機
会を与えてくれました。『仏像散策』『仏教の経
典』『新仏教語源散策』『仏教植物散策』（以上東

京書籍)『中村元の世界』(青土社)『比較思想論』

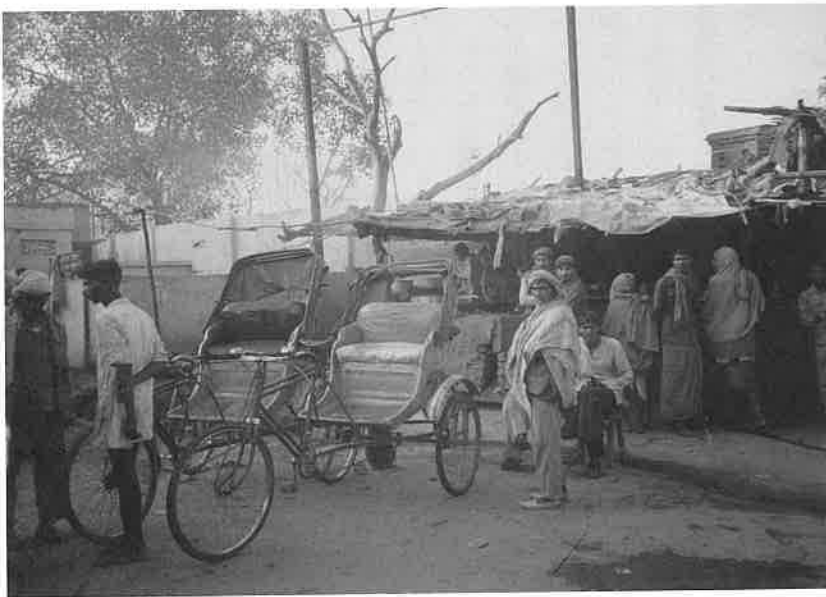
(放送大学教育振興会)『仏典入門』(NHK学園)『仏教伝来1』(学研)がそれです。

両先生のおかげで、小さな蟹の穴は、次第次第にその大きさを広げつつあるといえましよう。

二

一九七四年十一月、インドの亜大陸に足をふみおろしてからの数ヶ月は、見るもの聞くものすべて珍しく、目をきよろきよろさせるばかりでした。眼前にくりひろげられる人々の動きや自然の移ろいを、あたかも自分の心はいまだ日本にあって、映画のスクリーン上で見ているかのようにした。何しろ、わたくしにとって、このインド留学が、初めての海外体験だったからです。

しばらくは、インド英語にも耳がついてゆきませんでした。ババット先生は、それを見こし



たのでしよう。はじめは、プーナ大学の若手の講師についてパリー語のテキスト(清浄道論しやうじやうどうろん)を読むように指示されました。Kという名の女先生は、日本にも約一年間留学したことのある方で、仲々厳しい先生でした。先生の家へ、十分あるいは十五分でも遅れて行こうものなら、ご機嫌をそこねて、「この次、いらつしやい」とケンもほろろ。帰り路、「自分はインドへ学問を学びにきたのだ。法を学びにきたのだ」と自分にいいきかせつつ、この次は遅れないようにしました。K先生とは、二年間続きました。惜しむらくは、先生は四十歳を少しすぎて他界しましたが、あのバラモンの誇りをたたえた黒い大きな目をときに思い出します。

プーナにきて四ヶ月を満たすところ、バパット先生は「アベも言葉に少し慣れてきたな。ではテキストを読んでやるか」と判断されたのでしよう。所期のパリー・テキスト(清浄道論しやうじやうどうろん)の

大註)を、わたくしのために週二日読んでくださることになりました。毎金曜日と土曜日の、午前九時から十一時までの二時間。

ときどき寝坊をして、十分か十五分遅れて先生の家に行くことがありました。そんなときでも先生はちやんと椅子に坐って、待っていてくれました。ひとこともいわないで。

いくら官職を退かれ、自由の身になっても、八十歳を超えた老大家に、一対一で親しくテキストを読んでもらうことは、インドにあつても稀有なことでした。日本ではまず考えられないことです。恐らく、わたくしはバパット先生の最後の弟子となる榮譽を得ることになるでしょう。

三

バパット先生は、一八九四年六月十二日のお生まれですから、今年なんと満九十三歳。当時、身長一七五センチ、体重八〇キロ、体軀堂々、

典型的なマハーラーシュトラ・バラモンでした。

近代インドパーリ仏教学の祖ダルマナーンダ・コーサンビーを師とし、かれの推薦で、三十五歳のときアメリカに渡られました。一九三二年ハーヴァード大学より博士号を得られました。博士論文は「解脱道論げだつどうろん及び清浄道論の比較研究」と題するもので、インド人学者には不得手な漢文を駆使されたものでした。

先生はアメリカでのこんな想い出を語ってくれました。タンパク源の不足を補うために、インドでは口にすることがなかった卵を食べたこと。肌の色が少しく黒いので、黒人と見なされることがしばしばあって、インド人であることを表示するために、頭に白いターバンを巻いたこと。同窓に、日本からの故ミスター・ヒデオ・キシモト（東大教授岸本英夫先生）がいて、親しかったこと、などなど。

バパット先生は十数点の著作、百五十近い論

文を世に問われています。先生、どうかいつまでも長生きしてくださいように。

（つづく）

